

実践総合農学会 ニュースレター

Society of Practical Integrated Agricultural sciences NEWSLETTER 第18号 2019年2月20日発行



宮古島市 福里水位水質観察施設

目次

ごあいさつ	実践総合農学会会長 三輪 睿太郎 . . .	3
第 13 回地方大会（宮古島市）に参加して	東京農業大学総合研究所客員教授 岡 三徳 . . .	5
第 13 回地方大会（宮古島市）に参加して	東京農業大学国際食料情報学部助教 原 温久 . . .	6
第 13 回地方大会に参加して	宮古島市農林水産部農政課課長補佐 本永 健一 . . .	7
第 13 回地方大会に参加して	沖縄県宮古農林水産振興センター農業改良普及課 渡久山 みき . . .	8
第 13 回地方大会に参加して	東京農業大学大学院農学研究科 農業経済学専攻博士後期課程 1 年 玉木 志穂 . . .	9
第 13 回地方大会（宮古島）に参加して	－自分の研究を島の農業振興に繋げるために－ 東京農業大学国際農業開発学科 3 年 鳥山 日和 . . .	10
ホ口ホ口チョウ生産物の農大ブランド化の試み	東京農業大学農学部教授 小川 博 . . .	11
一期一会 –東京農大経営者大賞を受賞して–	株式会社大場造園代表取締役会長 大場 淳一 . . .	12
沖縄県宮古島市での地方大会を終えて（編集後記）	実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄 . . .	13
新会員のご紹介	. . .	15

表紙：三輪 睿太郎（実践総合農学会会長）

ごあいさつ

実践総合農学会会長 三輪 睿太郎



2019年初めてのニュースレターをお届けします。本年も会員各位のご期待に応えるべく着実な活動を続けていきたいと思っております。よろしくお願い申し上げます。

さて、第13回の地方大会が2018年11月25日に沖縄県宮古島市で行われました。大会では、東京農大宮古亜熱帯農場で作物開発を行っている菊野日出彦教授による基調講演「宮古地域における農業特性と新規作物導入による農業振興の展望」をもとに、新規就農者の確保をテーマにしたシンポジウム、さとうきび生産組合、野菜・果樹生産出荷連絡協議会ゴーヤー専門部会、島の駅みやこの各代表がそれぞれの

取り組みを語る座談会、沖縄県立宮古総合実業高等学校の生徒による研究成果発表が繰り広げられました。

今回はすべて宮古島関係者による話題提供でそれだけに、この離島の農業が余すところなく伝えられました。これまで開催した地方大会のどの場所にもなかったタイプの地域と農業で、このことは大会の前後に行われた充実した島内視察と合わせてみると良く理解できました。

宮古島全体は第二の空港建設も進み、大規模なリゾート開発が進みつつあり、港には中国からの豪華客船が着港しており、美しい海洋資源を看板にした保養、観光、インバウンドが市の経済の一層の発展を予感させます。農業においても、近年の青年農業者の伸びは顕著です。

最近の農業関係の講演では「生産性」「収益」「先端技術の導入」などを表に出したサクセスストーリーが多く、そこには「新たな画一性」さえみられるようになりました。

本大会での座談会における発表者の取り組みでは、亜熱帯作物が自己の努力にどう応えたかというようなことが前面に押し出されており、儲けにこだわらないというか、自足感を伴う経営の持続性というようなものが感じられ、かえって斬新に聞こえました。

島の主産物であるサトウキビの生産性は、福里、皆福、砂川の三か所の地下ダム開設によって灌漑が導入されたおかげで大幅に向上しました。今回、世界初といわれる地下ダムについて現地を視察できたのは大変ありがたく思いました。

結びに、大変なご協力をいただいた沖縄県、沖縄県農林水産部宮古農林水産振興センター農業改良普及課、宮古島市、東京農業大学宮古亜熱帯農場の各位にあらためて御礼申し上げます。

2018 年度実践総合農学会 第 13 回地方大会（宮古島市）プログラム

11 月 25 日（土）

◆個別研究報告

学会会員による研究成果の発表

◆基調講演

宮古地域における農業特性と新規作物の導入による農業振興の展望

東京農業大学教授 菊野 日出彦

◆シンポジウム

宮古地域における新規就農者の確保をめぐる現状と展望

一担い手育成による農業振興と地域活性化を目指して一

座長解題 シンポジウムのねらい

東京農業大学教授 高根 務

第 1 報告 新規就農に関する支援対策

沖縄県農林水産部宮古農林水産振興センター農業改良普及課 渡慶次 努

第 2 報告 『農業』その限りない可能性への挑戦

農業生産法人有限会社大嶺ファーム 上地 登

第 3 報告 就農定着プロジェクト

JA おきなわ宮古地区野菜・果樹生産出荷連絡協議会トウガン専門部会

重田 康行

パネル・ディスカッション

◆地域農業の取り組み（座談会）

話題提供者：川満 長英（上野地区さとうきび生産組合）

来間 正博（JA おきなわ宮古地区野菜・果樹生産出荷連絡協議会
ゴーヤー専門部会）

新里 五尾（宮古島穀物生産組合）※当日欠席

米田 隆己（株式会社パラダイスプラン 島の駅みやこ）

菊野 日出彦（東京農業大学教授）

司 会：上岡 美保（東京農業大学教授）

◆地元高校生による研究成果発表

沖縄県立宮古総合実業高等学校の生徒による「課題研究」の発表

「有機質肥料（バイオ・リン）におけるリン増殖と製造工程の流れ」

仲元 竜斗 以下 6 名（食と環境科 環境クリエイトコース）

「宮古島に眠る野菜の可能性～ナンコウカレーパン作りに挑戦！～」

仲間 志央里 以下 5 名（食と環境科 フードクリエイトコース）

コメント：田熊 重利（埼玉県立杉戸農業高等学校教諭）

第 13 回地方大会（宮古島）に参加して

東京農業大学総合研究所客員教授 岡 三徳



昨年 11 月の地方大会開催に、30 年ぶりに宮古島を訪ねる機会となりました。平成元年に農水省九州農業試験場さとうきび育種研究室（種子島）に異動した私は、南西諸島のさとうきび生産と普及品種の現状を学ぶために、島々を訪ね歩いたことを思い出します。

その頃の宮古島にはまだ地下ダムはなく、農地にはさとうきび畑が一面に広がり、肉牛と葉タバコ、野菜が生産されていました。年降雨量が多いものの、琉球石灰岩から成る平坦な島には水資源は乏しく、基幹のさとうきび作にも夏季には干ばつ被害が頻発しました。当時、この島に広く普及したさとうきび品種 NCo310 は、干ばつや台風などの天災に強い品種でしたが、それでも干ばつの被害を回避することができなかったのです。

こうした印象から、今の宮古島を訪ねて、島の姿が一変していることに驚きました。平良の街は大きく、農地にはさとうきびとともに、野菜畑、果樹園、牧草地が目立ち、連棟ハウスが並び、砂浜や橋は整備され、観光客でにぎわう風景がありました。宮古空港に着いてすぐのエクスカッションで、私は“宮古島の何かが変わった”と思いながら、バスの窓から多くの風景を眺めていました。

翌日には、JA おきなわ宮古地区本部で地方大会が開催されました。個別研究報告に始まり、基調講演、シンポジウム、座談会と続いて、地元の高校生による研究成果発表まで、地方大会らしく地域農業と振興に関わる多様なプログラムに多くを学び、討議にも参加しました。

シンポジウムで、「『農業』その限りない可能性への挑戦」と題して話題提供された大嶺ファームの上地さん。そのマンゴー作りへの挑戦と情熱から、観光農園の設立と販売力の強化、担い手育成まで、その力強く飽きない語りに、地域の農業リーダー像を描いてしまいました。次の話題提供は、神戸から宮古に移住・就農してトウガン栽培をスタートした重田さん。その苦労と努力、地域の仲間作り、そしてマンゴー作りの夢を実現した穏やかな語りは、その人柄がよく表れた就農実践報告となりました。

次のセッションは、地域農業の取り組みを語る座談会。総理大臣賞、農水大臣賞など多くを受賞した川満さんはさとうきび作り一筋の篤農家、ゴーヤー作りに山羊飼育で循環型農畜連携を実践する宮古地区ゴーヤー専門部会長の来間さん、そして島の駅みやこ青果担当の米田さんの 3 人から活動報告を受けて、質疑が交わされました。

最後は、ユネスコの研究奨励賞を受賞した宮古総合実業高校環境クリエイトコースのグループが取り組む研究成果の報告。“地下水保全を目的とした有機質肥料の製造”の発表では、地域課題の解決に向けたりっぱな成果に感心しながら聞きました。

“地域と農業の振興と環境”がテーマとなったこの地方大会に参加して、初日にバスで感じた疑問がようやく解決しました。多くの講演と報告を聞き、討議に参加して、宮古島では力強く地域と農業の振興が図られていることがわかりました。宮古島がいま元気な理由が、シンポジウムでの上地さんの講演から、ミバエの根絶、地下ダム建設によるさとうきびと熱帯果樹、野菜の生産向上に加えて、東京直行便の就航と国内外の観光客の急増に整理されることも知りました。“東京直行便はフライト農業にもつながり、多くの観光客はマンゴーなど熱帯果樹をたくさん買って帰る。客が運ぶマンゴー

には運賃も要らない。”との話には笑ってしまいました。

東京農大宮古農場のヤムとタロの遺伝資源を見学することも、地方大会参加の私の目的でした。エクスカージョンで訪ねた広大な農場には、アジア全域とアフリカから収集したヤムと東、東南アジアからのタロの遺伝資源保存数は日本一とのこと、遺伝資源管理研究にも関わった私には感激でした。

地域が元気なことは何よりです。懇親会で郷土食と泡盛を飲みながら楽しくお話しした地元の元気な皆さん、そして地下水の硝酸態窒素と土壌の難溶性リンの環境課題に取り組む高校生にもエールを送り、宮古島のいっそうの地域振興に期待して、参加報告を終えます。

第 13 回地方大会（宮古島市）に参加して

東京農業大学国際食料情報学部助教 原 温久



平成 30 年 11 月 24 日～26 日にかけて、エクスカージョンも含む実践総合農学会第 13 回地方大会（宮古島市）に参加した。

初日（24 日）は、宮古亜熱帯農場の副農場長である菊野日出彦先生に地下ダム資料館および亜熱帯農場をご案内いただいた。地下ダム資料館では、宮古島の地下水のメカニズムや地下ダムの構造についてご教授くださり、地下ダムがこの地域の農業生産になくてはならない重要な役割を果たしていることを知ることができた。また亜熱帯農場では、施設内の農作物の説明やグローバル GAP 認証によるヤムイモの畑を案内していただいた。

翌日の 25 日の地方大会では、はじめに基調講演として菊野先生による農業振興に向けた新規作物のヤムイモの導入と加工品（ヤムイモ焼酎：『ずみ』）の開発に関する報告があった。

その後のシンポジウム（テーマ：「宮古地域における新規就農者の確保をめぐる現状と展望—担い手育成による農業振興と地域活性化を目指して—」）では、3つの報告がなされた。

第 1 報告は、宮古農林水産振興センター農業改良普及課の渡慶次氏による新規就農の支援対策に関するものであった。新規就農の推進にあたって多くの機関・組織による協力・支援の存在を知ることができた。農業士による農業技術の指導・助言のほか、交換研修、モチベーションを上げる取り組みなど、手厚いサポートがあることが把握できた。

第 2 報告は、農業生産法人大嶺ファームの土地氏によるマンゴーの生産・販売や観光農園、6 次産業化等の取り組みのほか、若手生産者の担い手の育成に関するものであった。今日の農業に至るまでに幾つもの困難の経験があったことを知った。とくに、担い手の育成（取組み）のより以前には、台風の被災（施設の崩壊等）に直面しながらも、家族（息子さん）による支えがあったことにより、あきらめることなくその後も農業が継続できていることが印象に残った点である。

第 3 報告は、JAおきなわ宮古地区野菜・果樹生産出荷連絡協議会トウガン専門部会の重田氏による新規就農定着のための要件に関するものであった。要件として、農地の確保、就農ビジョン、栽培技術、経営管理、視察研修などが挙げられた。農地の確保に向けては、地域の行事に参加し、人脈作りが重要であることを知ることができた。また、新規就農者の励みに向け、野菜品評会による賞の役割も知ることができた。

今回のシンポジウムを通して、担い手の定着と継続に向けては、とりわけ人とのつながり、人の支えが重要であることを学び知ることができた。

最終日（26日のエクスカージョン）には、伊良部大橋のすばらしい美しい海（環境）を見させていただいた。宮古島市では年々観光客が増加しているとのことであり、農業（生産から加工・販売まで）が果たす役割も期待される。亜熱帯農場との連携を有し、美しい環境のもとで、今後ますますの宮古島の（焼酎の名に付けられたまさに「ずみ」）すばらしい農業の発展を祈念したい。

第13回地方大会に参加して

宮古島市農林水産部農政課課長補佐 本永 健一



平成30年11月25日に実践総合農学会第13回地方大会が沖縄県宮古島市において開催され、県内外から多くの方にお集まりいただきました。

さて、当市は沖縄本島から南西290km離れた離島であり、人口は約5万4千人です。近年は海外からの大型クルーズ船が寄港するなど、観光地として注目されています。宮古島は、温暖な気候と平坦な地形がもたらす農地を有し、農業には恵まれた条件下にあり、サトウキビが基幹作物ですが、近年では地下ダムの水を利用した園芸作物の栽培も拡大しています。

さて、学会では、はじめに東京農業大学の菊野日出彦先生による基調講演として「宮古地域における農業特性と新規作物の導入による農業振興の展望」というテーマで、宮古亜熱帯農場における調査・研究のご報告をいただきました。

続いて行われたシンポジウム「宮古地域における新規就農者の確保をめぐる現状と展望～担い手育成による農業振興と地域活性化を目指して～」では、第1報告で沖縄県農林水産部宮古農林水産振興センター農業改良普及課の渡慶次氏より「新規就農に関する支援対策」と題する報告があり、その中で宮古地域では新規就農者等が増加傾向にあり、新たな農業就業者による農業展開を予想させる動きが見られるとの話がありました。

第2報告では、「『農業』その限りない可能性への挑戦」と題し、農業生産法人大嶺ファーム代表の上地氏より宮古地域の新しい農業スタイルの可能性を提示していただきました。

第3報告では、「就農定着プロジェクト」と題し、野菜・果樹生産出荷連絡協議会トウガン専門部会の重田氏がIターンにより宮古島市で農業へ取り組んだ経緯等をユニークにお話しされました。

その後、地元関係者による座談会では「地域農業の取り組み」と題し、上野地区さとうきび生産組合の優良農家である川満氏、JAおきなわ宮古地区ゴーヤー専門部会リーダーの来間氏、そして株式会社パラダイスプラン「島の駅みやこ」で特色ある取り組みで観光客等を巻き込み誘客している米田氏により、地域活性化の取り組みや宮古地域の多様な資源を活用したビジネスを展開している地元企業としての立場から発言をいただきました。

終わりに、地元高校である宮古総合実業高等学校生徒さんによる研究成果として、「有機質肥料（バイオ・リン）におけるリン増殖と製造工程の流れ」の発表があり、宮古島の土壌環境保全に真剣

に取り組んでいることや、続いて「宮古島に眠る野菜の可能性～ナンコウカレーパン作りに挑戦！～」と題し、新しいフード作りに取り組む姿勢にも大変感心させられました。

交流会では、みゃーくの味加工推進協議会の皆さんによる宮古島市の特産食材を使った手作りの郷土料理を満喫し、参加された皆様から大変好評をいただきました。

今大会の成果を生かしながら東京農業大学と連携のもと、地域活性化の更なる取り組みを行っていきたいと考えております。

第 13 回地方大会に参加して

沖縄県宮古農林水産振興センター農業改良普及課 渡久山 みき



平成 30 年 11 月 25 日、宮古島市において開催された実践総合農学会第 13 回地方大会に参加しましたので報告させていただきます。

私の勤務する沖縄県宮古農林水産振興センター農業改良普及課は、直接農業者の皆さんに接し、農業生産技術や知識の指導と併せ、地域を支える担い手および新規就農者の育成を支援しております。日頃取り組んでいる業務が、本大会のテーマと関わりが深いこともあり、高い関心をもって参加させていただきました。

始めに、東京農業大学の菊野教授からの「宮古地域における農業特性と新規作物の導入による農業振興の展望」というテーマでのご講演では、さとうきびを基幹作物とする宮古島で、新たな品目としてのヤマイモの可能性について、栽培から販売までの取り組みを交えながらお話いただきました。気象条件や高齢化といった地域の課題を考慮しながら新規品目の導入を検討されており、さらなる宮古島の農業の可能性を感じさせる内容でした。

続いて行われたシンポジウムでは、「宮古地域における新規就農者の確保をめぐる現状と展望～担い手育成による農業振興と地域活性化を目指して～」というテーマで、農家および行政それぞれから報告があり、その後関係者によるパネル・ディスカッションが行われました。宮古島のマンゴー栽培の先駆者でもある上地氏からは、経営開始時の栽培面や販売面での苦勞、観光農業や六次産業化の取り組み、担い手育成についてお話がありました。失敗を恐れず新たなことに取り組む姿勢、それを担い手に伝える活動が素晴らしく感じました。また、I ターンで宮古島の農家になった重田氏からは、自身の経験を踏まえ、県外出身の新規参加者が就農定着するためには、地域や組織活動へ積極的に参加し、人脈を広げることが重要であるとお話がありました。お二方とも、地域の農業振興にかける思いが強く感じられました。行政側の担い手育成については、上司である渡慶次から新規就農者に関する支援対策として、就農相談から就農定着まで、関係機関・組織と連携したきめ細かな支援体制について報告があり、日々の業務の重要性を再認識しました。

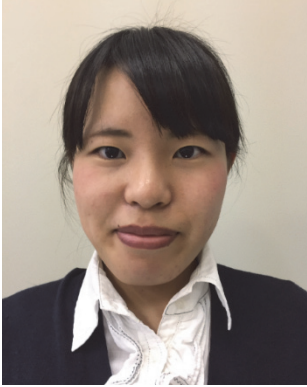
その後の座談会でも宮古を代表する生産者、企業から栽培や経営に対する理念についてお話がありました。また、宮古総合実業高校の生徒による研究成果発表も行われました。

このように関係者の農業振興についての熱い思い、様々な取り組みを拝聴することができ、大変有意義でありました。

今回のシンポジウムで得たことを糧に、今後も担い手育成・支援を通じた、宮古島の農業振興に取り組んでいきたいと考えております。最後に、実践総合農学会のますますのご発展を祈念し、報告とさせていただきます。

第 13 回地方大会に参加して

東京農業大学大学院農学研究科農業経済学専攻博士後期課程 1年 玉木 志穂



このたび実践総合農学会第 13 回地方大会に参加させていただきました東京農業大学農業経済学専攻の玉木志穂と申します。同大会のなかでもエクスカージョンの内容を中心に話しさせていただきます。

地方大会のメインは 11 月 25 日でしたが、その前後の 24 日および 26 日にエクスカージョンが実施されました。エクスカージョンは宮古島の豊かな自然を満喫できる行程となっており、東京農業大学宮古亜熱帯農場の菊野日出彦教授に案内していただきました。

11 月 24 日は、はじめに宮古島市地下ダム資料館に向かいました。私は「ダム」と聞いたとき、絶壁から放水するダムを想像していましたが、宮古島は島であり山はほとんどないことから、どのようなダムなのか興味を持っていました。沖縄県は台風が多く多量の雨が降るものの、地形・地質の保水性の乏しさから干ばつに見舞われることがしばしばありました。それを解決するために、水を含みやすい性質を持つ琉球石灰岩の地層を地中壁で区切り、地下水が海へ流出したり海水が地下水に浸入したりするのを防ぐことによって地下水として水を蓄えておくことができる「地下ダム」が開発されたそうです。地下ダムの一部を見学することができましたが、実際のダムは地中にあることから地上の生活に影響がないため利便性が高いダムでした。

続いて、宮古島の南東端に位置する東平安名崎を見学した後、宮古亜熱帯農場を訪問しました。同農場は、主に農学科や国際農業開発学科の学生、一般応募の農業研修生が住み込みで農作業や研究を行っているようです。ヤムイモやマンゴー、コーヒー、カムカムなどが栽培されていました。私は作物を対象とした研究は行っていませんが、上記の作物等を研究するのであればとても恵まれた環境だと感じました。

11 月 25 日は、JA おきなわ宮古地区本部で個別研究報告、シンポジウム、地域農業の取り組みに関する座談会、地元の高校生による発表、さらに美味しい伝統料理を囲みながら交流会が行われました。

11 月 26 日は、島尻のマングローブ林でマングローブに囲まれた水辺の遊歩道を歩いたのちに、雪塩工場で宮古島の豊かな自然から採った塩を試食して、同商品の生産過程について説明していただきました。次に、両側に美しい海を見ながら伊良部大橋を渡り、伊良部島へ向かいました。伊良部島内に位置する下地島空港は、2019 年 3 月に開業を予定しており、開業へ向けて試験運行をしている飛行機の離発着を近くで見ることができました。午後は、ユートピアファーム宮古島、島の駅みやこを訪問し、スターフルーツやドラゴンフルーツなどの宮古島の特産品の販売状況を見学しました。

私はエクスカージョンに参加して宮古島の多くの自然を見学し、さらに菊野先生から宮古島の農業や地理的特徴について勉強させていただき、有意義な時間を過ごすことができました。宮古島では、地域の特色を活かした観光業や農業が基幹産業となっていることを実感しました。観光業や農業を振興するためには、地域資源が極めて重要であるため環境負荷の少ない暮らしが不可欠だと思いました。

ご案内いただきました菊野先生、学会運営関係者の皆様、誠にありがとうございました。

第 13 回地方大会（宮古島）に参加して

—自分の研究を島の農業振興に繋げるために—

東京農業大学国際農業開発学科 3 年 鳥山 日和



東京農業大学国際農業開発学科 3 年の鳥山日和と申します。先生のご厚意により 2018 年 11 月 25 日に沖縄県宮古島市で開催された実践総合農学会第 13 回地方大会に参加する機会が与えられ、今後の自分の研究に活かすために参加させていただきました。

私が学会に参加するのは今回が初めてでした。この実践総合農学会では研究者や大学の先生のみならず地元の生産者や高校生なども参加しており、現場と研究の繋がりが明確であることが強く印象に残りました。

今回の学会で聴講させていただいた内容はどれも勉強になりましたが、その中でもシンポジウムのテーマでもあった「農業振興」および「地域活性化」について興味関心を持ちました。農業振興に繋がるキーワードとしては、「新規就農者の育成」、「新規作物の導入」の大きく 2 つが挙げられていました。新規就農者の育成に関しては、段階を追ってのサポート、様々な新規就農の形態、農業だけでなく地域社会との関係等が重要だという事を痛感しました。新規作物の導入に関しては、宮古地域で近年熱帯原産のマンゴーなどの導入も追い風となり、新規就農者、認定就農者、青年農業者等は増加傾向にあります。島の農業人口の減少抑制だけでなく、新規農業従事者による新たな農業の展開も期待されるのではないかと感じました。

近年日本では全国的に農業従事者の高齢化や担い手不足等の課題があり、各地域で様々な対策が検討されています。その中でも宮古島のような東京からの距離が遠い離島では、他の地域と異なったこの島特有の課題を抱えていることがわかりました。今回登壇してくださったマンゴー栽培をしているユートピアファームの土地登さんやトウガン農家の重田康行さんのお話から、台風の猛威やアルカリ性土壌などの農業にとって厳しい自然環境も印象深かったですが、島ならではの温かい人と人の繋がりの強さを感じました。農家さんの宮古島に対する想いを垣間見た気がします。

私は現在、東京農大宮古亜熱帯農場で、まだまだ新規であるコーヒーの栽培研究をさせて頂いています。将来的にこのコーヒーを宮古島の特産品として販売することを目標として掲げており、宮古島の厳しい自然条件に適応した栽培方法の確立を目指すだけでなく、生産物の販路の確保と開拓、加工品の開発と多様化も進めていく必要があると思います。また、導入する新規作物は観光客だけでなく、特に地元の人に愛されるようなものでないといけないと今回の学会を通じて強く感じました。高いハードルはありますが、この目標が達成できた時、コーヒーは新規作物として宮古島の農業振興に貢献できる可能性があるとは私は期待しています。今後、現場と研究の両方を大切にしながら、宮古島の農業振興及び地域活性化に少しでも貢献できるよう研究活動に励んでいきたいです。

ホロホロチョウ生産物の農大ブランド化の試み

東京農業大学農学部教授 小川 博



ホロホロチョウという鳥をご存じだろうか。西アフリカ原産のキジ目ホロホロチョウ科に属する鳥で、強健で他の家禽で致命的な疾病であるニューカッスル病や黒頭病などへの耐性が強く飼育しやすい鳥である。わが国には、東京農業大学の前身である東京農学校の初代校長の田中芳夫が、パリの万博の視察の際に持ち帰り紹介したとされる。研究面では、繁殖生理、飼育システム、抗病性、遺伝学、生理学、卵の栄養などに関する研究成果が本学から発信されており、本学と馴染みの深い鳥である。家禽としてのホロホロチョウは、肉用家禽としてフランスやイタリアでよく食されており、ロシアやハンガリーなどの東欧における生産量も多い。わが国では一

般には入手しづらく、高級料理として提供されたり、燻製として高値で販売されたりする例などが見受けられる。また、卵についてはほとんど市場には流通していない。ホロホロチョウ卵は卵殻が厚く固いこと、卵白量が少なく卵黄比が高いこと、カラザがない（見えない）ことなどから、生卵を食する習慣のある日本人に好まれる素材である。栄養的には卵黄の脂肪分が鶏卵より高く、レイン酸やリノレン酸などの不飽和脂肪酸を多く含むことや卵黄中のコレステロール含量が鶏卵より少ないことなどの特徴があり、食したことのある人には淡泊な風味とクリーミーな食味を好む人が多い。

近年、企業的な養鶏の経営形態が全国的に広がりを見せる中、地方の品種を用いた地域ブランドの創生が全国で試みられている。この場合、付加価値を高めるためには他との差別化が必要であり、様々な日本在来鶏が素材として用いられている。この点でホロホロチョウは、卵生産と肉生産の双方の素材として有望であり、小規模な農家においても生産から加工販売まで行う 6 次産業化の素材として適している。

以上のことから、ホロホロチョウについて、卵用家禽としての繁殖効率の向上、卵を使った生産物の開発、肉用家禽として付加価値を高めるための飼育方法や加工法について検討し、東京農業大学発のブランドとしての確立を目指している。

これまでの成果として、効率的な生産を行うための繁殖方法としての人工授精法の改善を行った。また、素材そのものの価値の向上を目指し、生産物の栄養成分の改善を目指す飼料の検討を行い、脂肪酸組成の調整の目途が立っている。

こうして富士農場で生産されたホロホロチョウ卵を厚木市内で限定的に試験販売しているが、好調な売れ行きである。今後ホロホロチョウ卵の販売を行う農家が現れたとしても、販路の開拓は容易であると感じている。

一方、加工による付加価値の向上を目指し、企業の方の協力を得てホロホロチョウ卵を用いたカステラ、どら焼き、プリンおよびカタラーナを試作した。中でもプリンは「農大ホロホロプリン」として、平成 29 年度から相模ベーカリーの協力を得て生産・販売を行っている。カタラーナはスペインのカタルーニャ地方のカスタードの上に焦がしたカラメルをのせたスイーツで、凍らせたものを半解凍後に食するように作っている。平成 30 年度からホロホロチョウ卵を用いて作ったものを「農大ホロホロカタラーナ」として試験販売を行っている。プリンもカタラーナも好評を博していることから、

今後、農大ブランドの商品として定着させたい。ただし、どちらも販売後の賞味期間が短いことから、次の課題として常温で提供できる製品の開発を目指したい。

また、今後の課題として事業化があるが、幸い、ホロホロチョウに興味を持ち、ホロホロチョウ生産に取り組むことを検討してくださっている企業も現れている。

本学としては、長期的には産卵率の高い農大ブランドの系統を作るために選抜を行うとともに、短期的には年間を通じた安定的な生産を目指し、繁殖方法の改善や育成方法の改善が必要である。

一期一会 – 東京農大経営者大賞を受賞して –

株式会社大場造園代表取締役会長 大場 淳一



私は、お陰様で昨年 11 月 30 日に開催されました東京農業大学経営者フォーラム 2018 におきまして、名誉ある経営者大賞を受賞いたしました。今回の受賞に際しましては、東京農業大学経営者フォーラム 2018 実行委員会委員長菅沼先生をはじめ、実践総合農学会事務局長で今回の経営者大賞審査委員長を務められました北田先生、ならびに私を今まで指導してくださいました造園科学科の先生方、さらには大変お世話になりました先輩、後輩の皆様衷心より厚く御礼申し上げさせて頂きたいと思っております。誠にありがとうございました。

さて、今回の受賞につきましては、私のようなものがいただけるものとは思っていませんでした。今回の執筆に際しましては、私のように農家から造園会社を興した父が経験したこと、そして私が父から教わり引き継いだもの、その中で私が何を考えどのようにしてきたかをお話しすることで、これから同じような道を行こうとしている後進の方々に何か伝えることが出来ればと思ってお引き受けした次第です。

私は造園業を営む家庭に生まれ、生まれながらに植木屋を継ぐものと思っていました。そして東京農業大学で造園学を学び、卒業後すぐに家業に入り、その後農大造園学科 OB 活動に参加している中で OB の方々が造園界で活躍している姿を見ているうちに、自分もいつかはそれなりの会社になりたいと思うようになり、今までの植木屋から造園会社を目指そうと思うようになっていきました。

そのような目で会社を見ると、今までの父のやり方にも疑問を感じていきました。しかし、父のやり方を否定するものではなく、時代にあった形にすることを心がけて取り組み、その結果が職人の労働環境向上であり会社の組織作りでした。まずは月 2 回（1 日・15 日）休みを週休とし、日給・月給を 1 ヶ月の給与制としました。そのことにより、社員も次第に増えていきました。社員が増えることにより、安定した仕事量が必要となり、今までの工事主体の営業活動から、手入れなど管理作業を重視して社員が計画的に仕事に従事できるような受注に努力してきました。ある程度人が集まると、仕事の幅も広がり、社内組織づくりを行い、工事部、総務部、企画営業部設計室、営業部などの部署を作り、各部署の活性化に努め現在に至る組織化を進めることができました。

ある程度組織ができ、人も増えていく中で、やはり会社には人づくりが大切との思いから、各専門学校等へのインターンシップ事業にも積極的に取り組んできました。また、社員教育にも力を入れ、各資格の取得、安全・衛生教育等も外部講師をお願いし、特に安全教育には力を入れています。加え

て、近年では交通安全活動・防犯パトロールなど、社会貢献活動にも参加しているところです。

こうして会社を発展させることができた最大の要因は「人」であったと思います。私は農大で造園学を学びました。しかしそれだけではなく、同じような志を持った先輩、友人から多くのことを学び、また OB 活動や、息子が農大にお世話になったのをきっかけに参加した教育後援会活動では、今まで知らなかった農大のすばらしさに触れ、そしてそこにかかわっておられる先輩方、先生方からご教授をいただき、多くの感銘をいただきました。これまでお会いした全ての方々に心より感謝申し上げたいと思います。これからも「一期一会」、人と人との出会いを大切に、更なる高みを目指していきたいと思います。今後ともご指導のほどお願いいたします。

沖縄県宮古島市での地方大会を終えて（編集後記）

実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄



本号は、平成 30 年 11 月 24 日（土）～26 日（月）に沖縄県宮古島市で開催された 2018 年度第 13 回地方大会参加者からの寄稿を中心に構成されています。寄稿者は、大学関係者や会員だけでなく、県宮古農林水産振興センターの渡久山みき様や宮古島市農政課の本永健一様にもご執筆いただいております。加えて、最近のニューズレターの定番である会員の皆様からのご寄稿として、小川博先生と大場淳一様にご執筆をお願いいたしました。ご多忙のところ本ニューズレターにご執筆いただきました大会参加者並びに会員の皆様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

ところで、2018 年度第 13 回地方大会開催地の決定につきましては、従来の学会事務局による決定からより広いご意見を伺うという形を取ることとし、実際には企画・総務委員会や編集委員会の皆様にお集まりいただき、その議論を経て今回の開催に至りました。

今まで鹿児島県屋久島町において地方大会開催の経験がありましたが、さらに遠方にある宮古島市での開催に不安もなかったわけではありません。そのような中、東京農業大学が 2005 年当時の平良市と包括的な連携協定を結んでいたこと、また 2013 年に宮古島市、東京急行電鉄株式会社、宮古観光開発株式会社と東京農業大学が産官学の包括連携協定を締結して実践的プロジェクトがスタートするなど関係が強化されつつあること、さらに宮古島市には 1986 年に熱帯農学に関する実習教育と試験研究を目的に開設された東京農業大学宮古亜熱帯農場があり、熱帯・亜熱帯農業の研究・教育を通じて宮古島地域の農業発展や環境保全に貢献するため、地域の関係機関や農家の皆さんとの連携が強化されつつあるという背景があり、そうしたことから開催の運びとなりました。

今回の地方大会の開催に際して、学会事務局の都合や遠方であることから余裕のある開催日としたいということで、当初祝日の 11 月 23 日（金）～25 日（日）【大会自体は 24、25 日の 2 日間】という 3 日間を考えていました。しかし、この時期は観光客や帰省客が多く、飛行機や宿舎が手配しにくいということで、結果的に開催日を 1 日遅らせかつ大会自体を 25 日（日）の 1 日に集約すること、そして前日に宮古島入り、大会翌日に宮古島を離れるという前後半の滞在時間を利用して島内の名所や関係施設を巡るエクスカージョンを実施するという日程を組ませていただきました。当初の大会予定を 1

日変更することになり、会員の皆様にはご迷惑をおかけしたと存じます。とはいえ、遠方にも関わらず、今回、会員の個別研究報告が当初の予想（9件）を上回る12件であった点は嬉しい誤算で、開会を急遽15分早めて報告時間を確保することになりましたが、これは会員の宮古島大会への関心の高さを物語るものであったと考えます。

大会に際してもう一つの大きな課題は、大会のメインテーマの決定でした。宮古島市は「エコアイランド宮古島」を宣言しており、珊瑚礁などの豊かな自然環境に恵まれ、他方で島内には大きな河川もなく生活用水はもとより、農業用水も地下水（地下ダム）に依存していることから、環境保全のための先駆的な様々な取り組みが行われておりました。そこでこれをメインテーマにすることも考えたのですが、沖縄県宮古農林水産振興センター農業改良普及課に地方大会の協力依頼に訪れた際、宮古島地域では、沖縄県、宮古島市、JAおきなわ、農業者が一体となって、青年農業者や新規就農者の育成に取り組み、多くの新規就農者が島内に定着しつつある実績を上げておられるということを伺い、しかも、想定されるパネリストについてもご示唆をいただきました。こうしたことから、今回のテーマ、「宮古地域における新規就農者の確保をめぐる現状と展望－担い手育成による農業振興と地域活性化を目指して－」を思いつくことができました。それに、宮古島の地下ダムを中心としたインフラ整備や環境対策、地下水を活用した新規作物の導入や定着化などを、座談会や高校生発表という形で組み入れるという全体構想が確定いたしました。

地方大会の開催に当たりましては、沖縄県宮古農林水産振興センター農業改良普及課、宮古島市役所農林水産部農政課、JAおきなわ宮古地区本部、宮古総合実業高等学校、東京農業大学宮古亜熱帯農場、そして交流会に際して宮古島の郷土料理をご提供いただいたみゃーくの味加工推進協議会等、多く機関や皆様にご大変お世話になりました。とりわけ、宮古亜熱帯農場の副農場長でもあり、今回の基調講演をご担当いただきました東京農業大学教授の菊野日出彦先生には、大会の企画段階から当日の大会運営、そしてエクスクーションの案内に至るあらゆる面で多大なるご支援をいただきました。

また、大会シンポジウムにおいてパネリストとして貴重なご報告をしていただきました、渡慶次努様、上地登様、重田康行様、座長の高根務先生、座談会にご登壇いただきました、川満長英様、来間正博様、米田隆己様、司会の上岡美保先生、そして宮古総合実業高校の生徒さんにご指導いただきました東宏樹先生、コメント担当の田熊重利先生には大変お世話になりました。これらの皆様に大会事務局として心より感謝申し上げます。



シンポジウム パネル・ディスカッションの様子

こうした多くの皆様の多大なるご協力のお陰をもちまして、大会事務局の企画能力や予想を超える素晴らしく充実したシンポジウム、地方大会が開催できたものと思われまます。そして、大会に参加された会員の皆様は、宮古島における自然環境、地域の特徴、農林水産業の現状や課題、今後の発展の可能性について、エクスカーションを含めて大いに実感できた大会になったのではないのでしょうか。もちろん、今回の地方大会の開催に際してご理解とご協力をいただきました地元宮古島市民や関係機関の皆様にも今回のシンポジウムが何らかの示唆を与えることができたとするれば、企画者の一人として大変光栄に存じます。いずれにしても、こうした成果の一端は、今号にご寄稿いただいた大会参加者の皆様の感想からも伺い知ることができるのではないかと思います。

最後に、このニュースレターを通じて、地方大会の良さが伝わり、多くの会員が学会活動や地方大会に関心を持って積極的に参加されることを期待したいと思います。今後ともよろしく願いいたします。



シンポジウム 座談会の様子

◆◆◆◆◆新会員のご紹介◆◆◆◆◆

平成 30 年度実践総合農学会入会者リスト（敬称略）

氏名	所属	会員種別
尹 堵鉉	東京農業大学	学生会員
村山 豊	東京農業大学	学生会員
松田 健太郎	東京農業大学	学生会員
木村 豪	東京農業大学	学生会員
溝花 優果	東京農業大学	学生会員
齋藤 修平	東京農業大学	正会員
門倉 利守	東京農業大学	正会員

実践総合農学会「ニュースレター第18号」

発行日：平成31年2月20日

編集責任者：実践総合農学会事務局長 北田 紀久雄

学会問い合わせ先：実践総合農学会事務局

〒156-8502 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学総合研究所内

TEL：03-5477-2532 FAX：03-5477-2634 E-mail：nri@nodai.ac.jp

<http://www.spia.jp/>
